



| | |
|--------------|---|
| Title | <書評>要真理子・前田茂監訳『西洋児童美術教育の思想：ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか?』 |
| Author(s) | 谷本, 尚子 |
| Citation | デザイン理論. 2018, 71, p. 60-61 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/67733 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

要真理子・前田茂監訳

『西洋児童美術教育の思想——ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか?』

東信堂, 2017年5月

谷本尚子／京都市立芸術大学

本書は、ドローイング教育について論じた欧文文献が集められ、解説翻訳された興味深い研究書である。

ドローイングについて論じた文献がデザイン研究の視点から注目されるのは、産業革命以降設立された実用的なデザイン学校において、基礎教育としてドローイングが取り入れられたからであるが、本書の目的はそこには無い。ここで採り上げられているドローイング教育とは、職工やアカデミーにおける専門教育ではなく、児童教育の中でドローイングを教育する方法及びその理論をめぐる言説である (p. iii)。

19世紀後半の英国の美術教育では、ジャン＝ジャック・ルソーの影響による子どもの自然性を保つことを重視する傾向と、この自然性を産業革命以降の社会に貢献できるものに馴致することを求める傾向の二つが存在したという (p. 3)。そして1870年代から1900年前後には人類史と子どもの発達段階とのアナロジーへの関心が高まった。これは未開民族の美術への関心の高まりと同時代であり、20世紀初頭の近代美術運動に見られるものとも共通する「プリミティヴ」という形容詞で子どもの造形と並列された。ドローイングの教育法についての言説の背景に、芸術アカデミーと産業界主導の国家戦略との相克があり、また子どもの絵の稚拙さをプリミティヴと称し、そこに特殊な美学的価値を与えようとした思潮があったという指摘が中心テーマであるように思う。

本書の第1章から第9章では、19世紀後半から20世紀初頭までの子どもの自由なドロー

イングの価値に関連する様々な論考があげられている。第10章は、美術教師による9章までの論考を背景とした実践を踏まえた教授法についての論説である。第11章は現在の美術史家によるフライの子どものドローイング論についての論考となっている。

以下、各章のタイトルと解説・翻訳者名及び解説の要点をあげる。

第1章 リチャード・セント・ジョン・ティリット「道徳教育としてのドローイング」：解説・翻訳前田茂。原本『絵画技術の手引き書』1874年、初版の序文、第2版の序文、第12章講演。サウスケンジントンの科学・芸術局によって数年にわたり教科書として採用された。フィレンツェ派の概略と論説を学んでから巨匠の作例を学ぶことが求められた。

第2章 コッラード・リッチ「美術史による「児童美術」の発見」：解説・翻訳加藤磨枝・山本樹。原本『子どもの芸術』1894年、リッチはイタリアの美術史家。子どもの制作を芸術と見なした。近年注目されているレッチョ・エミリア市の表現教育にも影響を与えた。

第3章 ベルナルド・ベレ「子どもの認知能力とドローイング」：解説・翻訳島本英明。原本「子どもにおける芸術：素描」『哲学批評』誌1888年、フランスの児童心理学者。ベレは子どもの絵の未熟さが、原始美術の特徴と共通性を持つとみなしていた。

第4章 トーマス・アブレット「ドローイングの「一般教育」化」：解説・翻訳前田茂。原本『初等学校における素描教授法』1889年、序論、第1章。教育的な素描の可能性につい

て書いている。素描教育により、他の科目の習得を容易にすると書いている。

第5章 スーザン・ブロウ「子どもの神秘的な想像力への寄り添い」：解説・翻訳立野良介。原本『象徴教育 フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」』第4章「児童期の象徴主義」1894年。ブロウはフレーベル主義の立場から幼稚園教育を行った。

第6章 エベニーザー・クック「外なる自然から子どもの内なる自然へ」：解説・翻訳要真理子。原本「美術指導において見過ごされてきた諸要素」1888年、「幼児教育に於けるいくつかの実験」1908年。クックはH.ペスタロッチとF.フレーベルの児童教育法を英国に本格的に紹介した。子どもにとって、数、幾何学、そのほか多くの事は、形態と切り離せないと考え、ドローイングの価値を教科全体と関連するものと考えていた。

第7章 ジェイムズ・サリー「[プリミティヴ]としての原始・未開・子ども」：解説・翻訳前田茂。原本『児童期の研究』第9章「芸術家としての子ども」及び第10章「幼き素描家」の一部、1895年。彼は子どもの創作を芸術活動と呼び、発達心理学の視点から収集分析を行った。

第8章 フランツ・チゼック「子どもの無知なる創造性を拓く」：解説・翻訳立野良介。原本「オーストリアの産業教育機関における自由デッサンの教授法」1908年。ロンドンで開催された「第3回デッサン、芸術の教授法の発展、およびこれらの産業への利用についての国際芸術会議」における講演から訳出。解説者はチゼックの教授内容にもプリミティヴと子どものドローイングとの類似性が見いだせる事、さらに子どもの表現の自由について論じているにもかかわらずプリミティヴへの志向を促している点を指摘している。

第9章 ロジャー・フライ「モダンアートに

よる児童美術の再定義」：解説・翻訳要真理子。原本「ブッシュマンの芸術」1910年、「子どものドローイング」1910年、「芸術を教える」1919年。彼もまた子どもの成長過程と人類の歴史展開を並行視していた。「プリミティヴ」とは、未成熟で洗練されていないといった意味ではなく、驚きや歓喜の体験を無媒介的に視覚化しようとする態度を指していた p. 276。

第10章 マリオン・リチャードソン「観察（外的自然）と自由（内的自然）の間で」：解説・翻訳要真理子。原本「1925年第2回ロンドン市評議会講演」、「子どもの描画とデザイン」1936年、「マリオン・リチャードソン女史による解説」1938年。リチャードソンは、「パターンを作ること」と「描くこと」は、分離したものではなく、一致した活動であるという主張し、絵画に主題（物語性）を見るのではなく、これを色や線が織りなす構成として見るべきだとするフォーマリズムの主張と合致するものだと、解説されている p. 306。

第11章 リチャード・シフ「社会史のなかの子どものドローイング」：解説・翻訳要真理子。原本「原始的系統発生から形式主義の個体発生へ ロジャー・フライと子どものドローイング」1998年。フライのフォーマリズムが子どもについての既存概念を振り所に論じられていたことが指摘されている p. 342。

昔、元京都市立芸術大学鈴木佳子教授からチゼックが芸大のデザイン教育に影響を与えているというお話を伺ったことがある。また近年、美術大学の入学試験においてもデッサンを課さない例が散見されるが、入学生の実技指導に困難を感じている授業担当者も多い。デザイン教育の現場でも、ドローイングの意味を改めて議論すべきであろう。